

現代日本語の性差に関する研究

—文末表現を中心に—

山 中 靖 子

1. はじめに

日本語は、男女の言語運用に違いのある言語であり、女性が主に使用することばを「女性語」、男性が主に使用することばを「男性語」と呼ぶことがある。今日では、女性による男性語使用も目立つようになり、その性差が縮小傾向にあるとされている。従来の研究によれば、「女性側のことばが男性に近づいている」、あるいは「脱女性語の傾向にある」という結論に至っているものがほとんどであるが、特にそれは文末表現の男女比較をすることによって導かれているものが多い。また、使用意識について言及している研究もあるが、なぜ女性たちはそのようなことば遣いをするのかという直接の使用理由を調査したものは見当たらない。そうした背景のもと、本稿では、女性による男性語の使用状況とその使用理由に関する調査を実施し、なぜそのようなことば遣いをするのかという女性側の言語使用意識について考察する。

2. 調査概要

2.1. 調査目的

特に女性の男性語使用に着目し、以下の点を明らかにする。

- ①文末表現において性差縮小の傾向はみられるのか。
- ②女性の男性語使用に対する意識はどのようになっているのか（使用理由など）。

2.2. 文末表現の性差

日本語の性差が現れる部分として『国語学大辞典』（1980）には(1)人称代名詞、(2)終助詞、(3)感動詞、(4)敬語、(5)接頭語が上げられているが、尾崎(2004)では「その双璧とも言えるのは自称詞と文末形式であろう」と述べられている。本稿においても文末表現(終助詞等)に焦点をあてていくが、終助詞や終助詞に付属する語も含めた文末部分に焦点を当てることにする。

文末表現において、男性語、女性語または中立語（はっきりと男性または女性が使用すると区別の無い語）のいずれの形式を使用するのかという点で重要なのは、その文末の意味に含まれる主張度だとも言われている。マグロイン・花岡（1993）によると、女性の使用する終助詞は主張度の低いものが多く、それは「女性は社会的に男性より低い立場にあるので、自己の主張を強く相手に押しつけるような表現は使えない」からだとして述べている。逆に主張度の高い表現は男性が使用するという傾向があるようだ。

一般に、女性専用形式とされている終助詞には、「かしら」「ね」「の」「よ」「わ」があり、男性専用形式とされる終助詞には、「ぜ」「ぞ」「な」が挙げられる。例えば、国立国語研究所（1951）によると、終助詞「ぜ」は「どうだいと言わんばかりの勝ち誇ったような気持、また、相手を見下すような気持のこもる場合」にも使用されるとあり、強い感情を表すときに使用できる語であることがわかる。同じように「ぞ」は「対等または目下の相手に対する言い渡し・おどかし・警告などの語気を含む」とあり、主張度の高い男性形式の典型と言える。また終助詞「わ」は『日本文法大辞典』（1971）によると上昇のイントネーション（「↑」の記号で表わすこととする）では女性語となるが、下降のイントネーション（「↓」の記号で表わすこととする）になると男性語になる。

それ以外の終助詞は、用法によって女性専用形式、男性専用形式のいずれにもなり得るため、それぞれについて主張度を調べ分類を行なった。

2.3. 調査方法

都内の大学に通う大学生の男女を対象に、ことばの使用状況とその意識に関するアンケート調査を実施した。調査の主な目的は「文末表現」の使用状況と男性語使用についての意識調査である。アンケートは女子大学生用と男子大学生用の2種類を作成した。女子大学生は102人、男子大学生は74人分のデータを得ることができた。

文末表現についての使用状況と個々の文末表現から受ける印象については、男女ともに同一の設問で調査を行ない、意識調査の項目は、男子学生用には周囲の女性が使用する言葉遣いから受ける印象について、女子学生用には自分自身のことば遣いについての意識と自分以外の女性が使用していることばから受ける印象についての設問を用意した。

3. 調査結果の分析と考察

3.1. 実態調査

今回の調査では男性専用，女性専用，中立の文末表現をそれぞれ選定した上で，調査票にはそれらをランダムに配置し，使用頻度を「普段からよく使用する」「場面によっては使用する」「あまり使用しない」「まったく使用しない」の4つから選択してもらう方法を取った。また，使用頻度とともにその文末表現の持つイメージについても尋ねた。以下に設問の一例を載せる。

次の終助詞または文末表現について①使用頻度と，②そのイメージについて最もあてはまるもの1つにマルをつけてください。

～ぜ （例 「早く行こうぜ」「一緒に勉強しようぜ」）

①使用頻度

ア. 普段からよく使用する。 イ. 場面によっては使用する。
ウ. あまり使用しない。 エ. まったく使用しない。

②イメージ

ア. 男っぽいイメージ イ. 女っぽいイメージ ウ. 偏ったイメージはない

3.1.1. 女性形式の使用状況

まず「女性専用」または「女性的用語」に分類される文末表現を女子学生がどの程度使用しているか結果を見ていく。

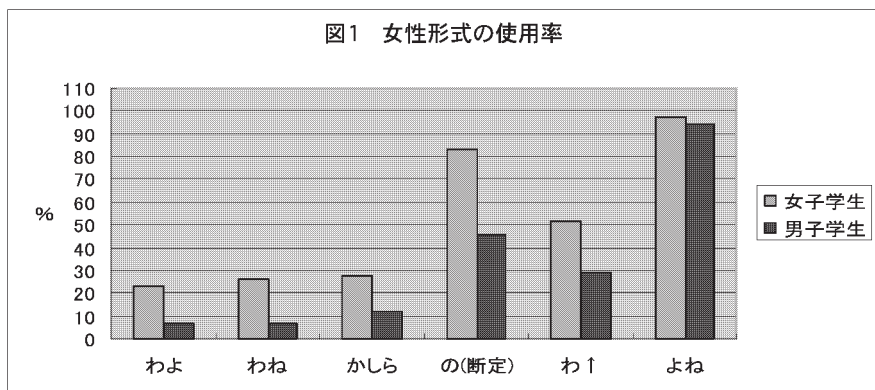
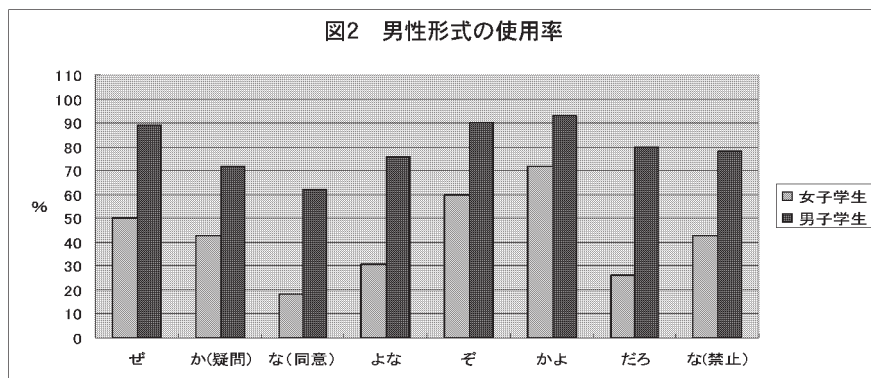


図1は女性形式の使用率（選択肢ア・イの割合を合計したもの）を男女で比較したものである。「わよ」「わね」「かしら」の使用率が大体20～30%と低かったのに対し、「の（軽い断定）」「わ↑」「よね」は使用率50%を超えており、「普段から使用する」との回答も半数以上あった。特に「の（軽い断定）」と「よね」はかなり日常的に使用されている表現であると言える。女性形式のなかでも、使用率に大きく差が出る結果となった。

ここで男子学生の結果を見てみる。女子学生の使用率が高かった文末表現は、男子学生の使用率もかなり高くなっていることがわかる。「わよ」「わね」「かしら」は10%前後の使用率であるのに対し、「の（断定）」「わ↑」「よね」は順に、46%、29%、94%という高い使用率であった。特に「よね」に関しては「普段からよく使用する」との回答が69%と、「場面によっては使用する」との回答を大きく上回っており、女子学生の使用率と大きな違いは見られない。

これらの女性形式がどのようなイメージで捉えられているかについての結果もあわせてまとめると以下ようになる。

- ・「わよ」「わね」「かしら」：女子学生、男子学生ともにほとんど使用しないが、女性形式であると認識されている。
- ・「わ↑」：女子学生の使用率は50%を超え、男子学生も30%使用する。男女ともに女性形式であると認識している。
- ・「の（軽い断定）」：女子学生にも男子学生にも使用されている。特に女子学生の使用率は80%を超え、日常的に使用されている。男子学生の使用率も約5割と高い。男女ともに女性形式と認識している。



- ・「よね」：女子学生、男子学生ともに使用率9割以上。日常的に使用している。女性形式との認識はなく、偏ったイメージを抱いていない。

3.1.2. 男性形式の使用状況

次に男性形式の使用状況を見ていく。図2は男性形式の文末表現の使用率を男女で比較しグラフ化したものである。

女性形式の文末表現の場合は、女性形式だからといって女子学生の使用率がすべて高いわけではなく、3割に満たないものもあった。しかし男性形式の文末表現の場合は、男性の使用率がどの表現においても高い。すべての文末表現で使用率60%を超えており、「普段からよく使用する」の回答率も全体の半分以上を占めるものが多い。これより、男子学生はこれらの男性形式の文末表現を日常的に使用しているということがわかる。

女子学生の使用率に着目すると、「な（同意を求める）」「だろ」「よな」は低いものの、それ以外はすべて使用率が4割を超えていることがわかる。8例の文末表現のうち、使用率4割を超えるものが5例ということで、女子学生が男性形式の文末表現を多用していると言える。特に「ぜ」「ぞ」は過半数を超え、「かよ」は約7割と極めて高い使用率になっている。「な（禁止）」「か（疑問）」の使用率も過半数まではいかないが高めである。

男性形式に対するイメージをあわせてまとめると以下ようになる。

- ・「な」「だろ」「よな」：女子学生の使用率は低い。
- ・「か（疑問）」「な」：女子学生の使用率が約40%と、ある程度の使用が見られる。
- ・「ぜ」「ぞ」「かよ」：使用率が50%を超え、「かよ」に関しては70%以上。男性形式の中でも、女子学生の使用率が特に高い文末表現である。
- ・女子学生は、これらの文末表現8例をすべて男性形式として認識している。
- ・男子学生は、これらの文末表現8例を日常的に使用している。「か（疑問）」は偏ったイメージを抱いていない人が多く、それ以外の7例はすべて男性形式と認識している。

3.1.3. 文末表現における傾向

これまで、女性形式と男性形式の文末表現について使用状況を見てきた。全体的に、文末表現においては性差縮小の傾向にあると言えよう。

理由として挙げられることは、

- ・女性形式の文末表現の中に、女性にほとんど使用されない文末表現がいくつかあった。
- ・女性形式の文末表現の中で、女性形式と認識されているが、男性にも多く使用されているものがあつた。
- ・女性形式の文末表現の中で、女性形式として認識されておらず、男女ともに使用しているものがあつた。
- ・男性形式の文末表現の中で、女性の使用率が4割を超えるものが8例のうち4例あり、その中で50%以上のものが2例、70%を超えるものも1例あつた。

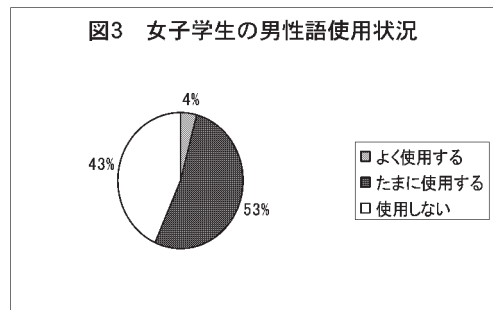
の4点である。女性による男性形式の使用が多いということは明らかだが、男性の女性形式の使用による性差縮小も、文末表現においてはあると言えるだろう。

女子学生の文末表現の使用の実態として、女性形式として認識されていながらあまり使用されないものもあり、男性形式として認識していながらあえて使用されているものもある。この理由については「3.2.」で見えていく。

3.2. 意識調査

3.2.1. 男性語使用の頻度

「3.1.」からやはり性差の縮小が起こっているということが実態としてわかつた。女性が女性専用の形式をあまり使用しなくなり、男性的表現も使用するようになってきている理由はどこにあるのだろうか。まずは女子学生を対象に、普段のことは遣いにおいて男性語をどの程度使用する



するか調査した。選択肢に「aよく使用する」「bたまに使用する」「c使わない」の3つを用意した。その結果を示したのが図3である。自身で意識しているだけでも約半数の女子学生が男性語を使用することがあるという状況がわかる。

3.2.2. 男性語の使用理由

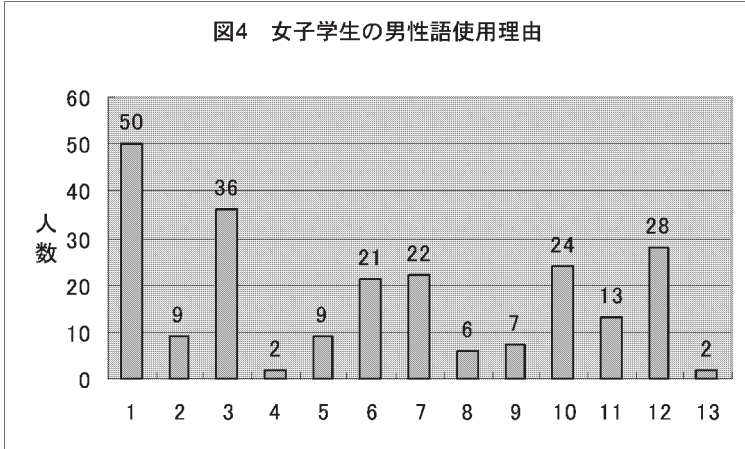
男性語を「aよく使用する」「bたまに使用する」と回答した人を対象に、男性語の使用理由を尋ねた。使用理由として考えられる項目を挙げ、「aあてはまる」「b多少あて

はまる」「cあてはまらない」のうち1つを選んでもらった。図4はその結果、選択肢「aあてはまる」「b多少当てはまる」を合計した数値をグラフ化したものである。この設問の対象となったのは「男性語を使用する」と答えた58人である。使用理由として挙げたのは次の13項目である。

- (1)相手との親密さを表すため。
- (2)相手に不快感を与えるため。
- (3)周囲の人に対して親しみやすいと思ってもらうため。
- (4)周囲の人にとっつきにくい印象を与えるため。
- (5)使用することで男性と対等であると思えるため。
- (6)女っぽいことばが好きではないため。
- (7)男っぽいことばのほうが自分の性格に合う(気がする)ため。
- (8)カッコいいと感じるため。
- (9)かわいいと感じるため。
- (10)周囲(家族や兄弟、友達等)がそのようなことば遣いをしているため。
- (11)女らしいことば遣いをするのが恥ずかしいため。
- (12)活発な印象を与えたいため。
- (13)こわい印象を与えたいため。

男性語の使用理由として回答が多かったもの上位5項目は1番多いものから順に(1)相手との親密さを表すため、(3)周囲の人に対して親しみやすいと思ってもらうため、(12)活発な印象を与えたいため、(10)周囲(家族や兄弟、友達等)がそのようなことば遣いをしているため、(7)男っぽいことばのほうが自分の性格に合う(気がする)ため、であった。上位3項目の(1)は自分と相手の関係が良好であることを示そうという意味があり、(3)(12)も周囲の人に与える印象を良いものにしたいという意味がある。両者ともプラスの効果을期待して男性語を使用しているということになる。女子学生にとって「親しみやすい印象を与える」や「親密な関係を示す」効果があるのは、女性語ではなく男性語だと捉えられているようである。女性語の特徴である丁寧さという面からすると、男性語のほうがぐだけたイメージがある。仲の良い友達や仲間うちでは、丁寧な表現より、ぐだけたことばを使用する方が仲間意識を強めることにつながり、「親しみやすさ」や、「親密な関係を示す」という効果を出すと考えられそうである。また、使用理由の上位に「活発な印象を与えたいため」も挙げられている。『国語学大辞典』(1980)によると、女性

図4 女子学生の男性語使用理由



語の大きな特徴として「敬語的表現，丁寧な言い方，婉曲な物言いや言い切らない表現が多い」ということがある。婉曲表現が多い，または言い切らない表現が多い，という女性語では，活発な印象を与えたいと思ってもそれはできないという意識が背景にあり，そのため男性的な表現にそれを求めるのも無理はないと言える。

項目(2)(4)(13)のような，あえて悪い印象を与えるために使用するというケースはごくまれだということがグラフの結果からわかる。れいのるず（2001）で紹介されているエピソードがある。事故にまきこまれ息子をなくしたロシア人の母親がロシア当局に抗議する映像に添えられた字幕が，女性語の文末表現「のよ」や「わ↑」を使用したものだった。女性語の「断定の気持ちを軽く表現する」終助詞の「の」や話の内容をやわらげ，刺激のないやわらかな感じを表す「わ↑」を使用した字幕と母親の怒りの声とのギャップに「日本語の女ことばでは怒りが表現できない…」と述べられている。字幕の内容はその通りであっても，そこに表現をやわらげる，またははっきり言い切らない効果を持つ女性語の終助詞を付してしまっははそのときの怒りは伝わってこないということである。(2)の「相手に不快感を与えるため」という理由や，(13)「こわい印象を与えるため」という理由は，けんかなど相手と良くない関係にある場面で使用されることが想定される。その場合は相手に怒りを抱いていることもあるだろう。しかしその怒りの気持ちを女性語で表現するには制限が出てくるため，男性語の表現で補っていると言えるだろう。

(6)(11)は女性語に対するネガティブなイメージにより，男性語を使用するという理由である。高崎（1996）では，ドラマの女性語に関する考察において「女性主人公たちが魅力的に“非女性語”を駆使することによって言葉で媚びなくても男に愛される女の造型

に結びついているといえよう」と述べている。(11)の「女らしいことは遣いをするのが恥ずかしいため」との理由は、女性語を使うことに「媚び」が含まれると考えていることが読み取れる。使用理由の自由回答には「可愛いこぶってると思われたくないため」という回答もあった。

3.2.3. 男性語から受ける印象

男性語を使用する側の意図としては「親密さを示す」「活発な印象を与える」ということがあったが、次に、そのことば遣いを受けとめる側はどのような印象を抱くのかという点について見ていく。調査では、ことば遣いから受ける印象として考えられる16の選択肢を用意し、自分の感じる印象として当てはまるものすべてを選んでもらった。16の選択肢は以下の通りである。

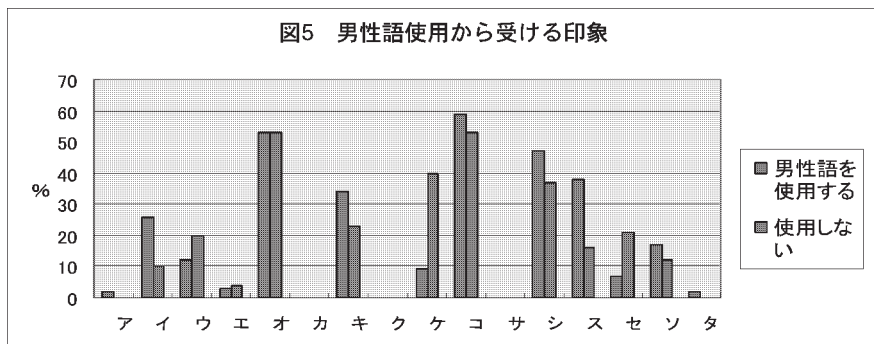
ア、頭が良さそう	イ、頭が悪そう	ウ、かっこいい
エ、かわいい	オ、(性格が)きつそう	カ、おっとりしている
キ、明るい	ク、暗い	ケ、こわい
コ、活発	サ、丁寧	シ、乱暴
ス、親しみやすい	セ、近寄りがたい	ソ、子どもっぽい
タ、大人っぽい		

まず、回答が多かったものを見ていく。

表1は、受ける印象として回答が多かった5項目を男女で比較しまとめたものである。女子学生と男子学生とでは、第1位と2位が入れ替わっているものの、第4位までは同じ印象が選ばれ、第5位には「明るい」「こわい」とそれぞれ異なった項目が選ばれている。この結果を見ると、女子学生の回答の多いものの上位5位までに「活発」「親しみやすい」「明るい」と、プラスイメージの印象が3つ選ばれているのに対し、男子学生の場合はプラスイメージの印象は2つであった。一番多かった回答を比べると、女子学生の場合は「活発」というプラスのイメージであるが、男子学生は「(性格が)きつそう」というマイナスイメージの印象となっている。ここに、使用する側である女性が抱く印象と、「女性が使用する男性語」の受け手となる男性の抱く印象との違いが現れているといえよう。「親密さを表わすため」「活発な印象を与えたいため」という意図で男性語を使用している女子学生は、自分以外の女性が男性語を使用していても、「親しみやすい」「活発」「明るい」などの印象を抱くといえる。

表1 男性語使用から受ける印象の上位5項目

回答上位5項目	女子学生	男子学生
1	コ, 活発	オ, (性格が) きつそう
2	オ, (性格が) きつそう	コ, 活発
3	シ, 乱暴	シ, 乱暴
4	ス, 親しみやすい	ス, 親しみやすい
5	キ, 明るい	ケ, こわい



次に女子学生の中でも、男性語を使用すると答えた女子学生と使用しないと答えた女子学生に分けてデータを見てみる。図5がそれを比較したグラフである。これを見ると、自身が男性語を使用するか否かでは女性でも受ける印象に差があるということがわかる。「ケ、こわい」にまず大きな違いが現れている。使用しない女子学生で「こわい」という印象を受けるとの回答が40%と高いのに対し、使用する女子学生では10%未満という大きな差がでた。「セ、近寄りやすい」という回答も、使用しない女子学生では21%なのに対し、使用する女子学生の場合は7%と3分の1に減少する。「ス、親しみやすい」は男性語を使用する女子学生のほうが約20%も高く、「キ、明るい」も男性語を使用する女子学生の方が10%も高い。男性語を使用する女子学生の受けとめ方としては、活発さや親しみやすいイメージを抱いているが、一方で、使用しない女子学生は男性語使用から「こわい」「近寄りやすい」とのマイナスイメージを抱いている。男性語を使用するか

否かは、イメージの違いに大きく左右されるといえよう。また、男子学生、男性語を使用しない女子学生で回答が多かった「性格がきつそう」という項目は、男性語を使用する女子学生にも回答が多く見られた。つまり男性語を使用する女子学生でも、自分が使用し、相手に与えるであろう印象と、他人が使用する男性語から受ける印象とでは微妙にずれが生じているといえる。

4. 全体を通しての考察

「2.1.」であげた調査目的に対し、以下のことが明らかになった。

①文末表現における性差縮小の傾向

女性形式をあまり使用しなくなる脱女性語の傾向がみられる。女性形式と認識されているもので男子学生にも使用されている表現も多く、男性側からの性差縮小もみられる。男性形式の文末表現においては、男性形式と認識した上で女性に使用されているものが多く、女性による男性形式使用の性差縮小が起こっている。

②女性の男性語使用に対する意識

男性語の使用理由には、相手に対し「親密さを表わす」「親しみやすい」「活発」という印象を与えることである。また、女性語では表現しきれない怒りといった激しい感情を表現するために使用する。

文末表現の実態調査においては性差縮小の傾向が見られるという結果になった。このような結果になったのは女性語そのものの特徴が関係していると考えられる。例えば文末表現においては、語調を和らげる働きがあるもの、主張度の低いものが多く、強く主張したい場合に表現しきれない。激しい怒りの感情も、女性形式の文末表現では怒りがやわらげられた表現になってしまう。つまり、女性語では強く訴えかける感情をそのまま相手に伝えることができない場合がどうしても生じてしまうのである。女性語で表現できないとするならば、男性語の表現を借用するしかない。つまり、文末表現においては女性語では表現しきれない状況を男性語の使用で補うという意図があり、それが性差縮小の一つの要因と考えられる。

このことば遣いの変化は時代の変化を反映しているともいえる。「3.2.2.」の結果で、男性語使用理由の上位に「活発な印象を与えたいため」が挙がっていた。女性にとって「活発さ」というものが重要視されるようになったのは比較的最近のことと思われる。しかし女性語では「活発さ」を表現できないため、男性語を使用することで、相手に活発な印象を与えようとの意図がある。ではその性差縮小の傾向が現れる以前の、女性語

を使用することをよしとしていた時代はどうだったのであろうか。それはこれまで見てきた、女性語のもつ特徴である「丁寧さ」や「強く主張しないやわらかさ」など、しとやかであることが求められていた時代であったと考えることができる。ここに女性の理想像の変化が現れているといえるだろう。しとやかで主張することを控える女性から、さばさばした活発な女性へと理想像が変化したと考えられる。そのため、女らしさを表現する女性語の使用が減少し、活発さや明るさを表すために女性語では表現し得ないことは、つまり男性語の使用が増えた、と考えられる。社会進出により女性も自分の考えを主張することの求められる時代においては、そのように女性の理想像が変化することは自然な流れだろう。

5. 今後の課題

今回の調査目的は「性差縮小」の実態を把握することと、その理由を明らかにすること、という2点であったため、発話相手による使用状況の違いまでは調査が及ばなかった。もちろん、相手が異なれば、文末表現でも男性語・女性語の使用に何らかの変化があるものと考えられる。女性の使用する男性語に関する意識調査では、自由回答として「親しい人が(男性語を)使うのであれば、お互いのことを知っているだけに悪いイメージはないが、特に親しい間柄でない人が使っているとマイナスのイメージを受けると思う。」という意見が多く、受ける印象も、相手によって異なるようである。相手の違いによることば遣いの変化、相手の違いによる性差縮小の実態の変化については今後の課題としたい。

6. おわりに

日本語の性差縮小について調査し、結果を考察していくことで、ことばが持つ力というものを思い知ることとなった。その人が使用することば遣いによって、その人自身の印象は大きく変わる。そのことを踏まえた上で話していても、自分が相手に与えるだろうと思っている印象と、相手を受ける印象とは必ずしも一致しない。ことばのこわい面でもあると思う。現代社会では、性別による制約、女性は女らしく、男性は男らしく、といった固定観念は薄れつつあると感ぜられる。ステレオタイプの女性語は、はっきりと主張をしないということをよしとするが、それが社会に出たときにも求められるかというところではない。女性語の特徴である丁寧で、やわらかいもの言ひも、性別に関係なく状況に応じて使用したほうがいい場面もあり、女性であってもはっきり主張しなけ

ればいけない場面もあれば、怒りを表現したい場面もある。女性だから女性語を、男性だから男性語を、ということではなく、その場その場に合ったことばを選択し運用していくというスタイルが定着していくであろう。ただ、日常生活の中で男性語を多用しているひとりとしては、そのことを乱暴なことば遣いをしても構わないと勘違いせず、普段の生活のなかで、聞き手にとって気持ちの良いことば遣いを身に付けていきたいと思う。

最後に、今までご指導いただいた篠崎晃一先生をはじめ、アンケートに回答してくださった多くの方々、アンケート収集に協力してくださったの方々、この論文を書くにあたり力を貸してくださったすべての方に深く感謝申し上げます。

参考文献

- 尾崎喜光 (2004) 「日本語の男女差の現状と評価意識」『日本語学』23巻7号 pp.48-55
- 北原保雄編 (1981) 『日本文法辞典』有精堂出版
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 国語学会編 (1980) 『国語学大辞典』東京堂出版
- 国立国語研究所 (1951) 『現代の助詞・助動詞 用法と実例』国立国語研究所
- 小林美恵子 (1993) 「世代と女性語—若い世代のことばの「中性化」について—」『日本語学』臨時増刊号12巻6号 pp.181-192
- 新村出編 (1998) 『広辞苑 第五版』岩波書店
- 杉本つとむ (1998) 『近代日本語の成立と発展』八坂書房
- 鈴木睦 (1993) 「女性語の本質—丁寧さ、発話行為の視点から—」『日本語学』臨時増刊号12巻6号 pp.148-155
- 高崎みどり (1996) 「テレビと女性語」『日本語学』15巻9号 pp.46-56
- 高崎みどり (2004) 「話し言葉の性差—男性の「女性語」使用とジェンダーの関わりに注目して—」『明治大学人文科学研究所要綱』54 pp.161-173
- マグロイン・花岡直美 (1993) 「終助詞」『日本語学』臨時増刊号12巻6号 pp.120-124
- 松村明編 (1969) 『古典語現代語 助詞助動詞詳説』学燈社
- 松村明編 (1971) 『日本文法大辞典』明治書院
- 松村明編 (2006) 『大辞林 第三版』三省堂
- 柳父章 (1984) 「文末の表現」野村雅昭編『日本語の働き』pp.223-241 筑摩書房
- れいのるず秋葉かつえ (2001) 「日本語の中の性差のゆくえ」『言語』30巻1号 pp.30-35

ABSTRACT

In comparison with other languages, the Japanese language has clear sexual distinction in its words. Sexual distinction is especially outstanding in personal pronouns, such as *boku* and *atashi*, and in the end of a sentence, such as *ze*, *zo* and *wa*. In recent years, sexual distinction in words has decreased. This is partly because women's language has changed a lot. In this thesis, by using questionnaires, I researched the actual conditions and awareness of college students in order to investigate the decrease in sexual distinction in women's language. As a result, we can see there is clear sexual distinction in the first personal pronouns, but in the second personal pronouns we can see women intentionally use men's language. In addition, in the end of a sentence, women also use men's language and the usage rate exceeds 50% in some words. This research showed that women use those words knowing they are men's language. Therefore, among the young people, the decrease in sexual distinction of language has emerged. It is because women have come to think that men's language is friendly and active. The images of ideal women have changed. Nowadays, women are not slaves of convention which forces them to be careful in their choice of words such as women's language and men's language, but they can select effective words according to circumstances.